令和６年度　第３号
常磐野小学校　校長室だより
令和６年６月１４日発行　文責　清川　秀一

学校教育目標　つながり、深まり、未来をつくる子

13 日（木）に行われた授業参観に引き続き、「児童引渡し訓練」にご協力を頂き、誠にありがとうございました。多くの保護者に来ていただき、災害時についての共有ができたことは、大変良かったと思っています。

さて、２０２４年は能登半島の地震からスタートしましたが、過去にも大きな地震が起きるたびに、制度や考え方が変わっていきました。阪神淡路大震災の時には、地震の強さを表す震度に「強」「弱」がつき、復興のための災害ボランティアが活躍し、「ボランティア元年」と言われるようになりました。東日本大震災では津波の恐ろしさを実感し、原発に対する議論も高まりました。大阪北部地震ではブロック塀の強度が問題になり、「ふりかえる」と災害のたびに私たちも教訓を得てきたように思います。

６年生は先月、修学旅行で和歌山へ行き、「稲村の火の館」を見学しました。その地は安政元年（1854 年）に大地震が発生し大津波に襲われました。その時、和歌山県広村の濱口梧陵は、稲むら（稲束を積み重ねたもの）に火を放ち、この火を目印に村人を誘導して安全な場所に避難させました。さらに、津波により変わり果てた故郷の復興のために身を粉にして働き、復旧作業にあたりました。また、津波から村を守るべく防波堤の築造にも取り組み、後の津波による被害を最小限に抑えました。その偉業と精神、教訓を学び受け継いでゆくために「稲むらの火の館」が建設されました。修学旅行ではまさに過去の出来事を「ふりかえり」、未来に生かすための学習を行いました。

学校の授業においても、実は「ふりかえり」を大切にした授業構成をおこなっています。通常の授業では「導入：課題設定」「展開：課題解決」「まとめ・ふりかえり」という流れで学習しています。ふりかえることにより、学びの効果は高まると言われているからです。客観的に授業のプロセスを捉えることは、自身のメタ認知につながり、「人の気持ちや立場を考える力」や「自分の思考や気持ちを表現する言語能力」を高めることが期待できます。大人の世界においても仕事の質の向上を図るために用いられ、課題を共有し、改善すべきことを明確化することに役立てていると思います。しかしこれは、日常の出来事においても同じかと思います。例えば、ＮＨＫの「光る君へ」により、平安時代の文学に注目が集まっていますが、日記や随筆などの日常を題材にした作品が多く、毎日を丁寧に過ごしていることがわかります。現代を生きる私たちも、課題に思うことや、よかったことなどを、日常で振り返りながら生活の質を高めることができればいいですね。